

ロシアと日本におけるキタオットセイの行動と生態 Behavior and ecology of northern fur seals in Russia and Japan.

三 谷 曜 子

北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター

キタオットセイ *Callorhinus ursinus* はベーリング海、オホーツク海など、高緯度海域の島嶼を繁殖地とする。成熟メスは6-7月に繁殖場の上陸し、1頭の子を出産する。母親は出産後しばらくたつと、数日-1週間程度の採餌トリップに出かけ、海と陸の往復を繰り返す。トリップ中の採餌戦略には、1) 深い潜水：大陸棚の海底まで日夜を問わず深い潜水を行う、2) 浅い潜水：水深の深い海域で、主に夜に浅い潜水を行う、という2タイプがある。前者では、底性生物を、後者では夜間に鉛直移動をして浮上する生物を摂餌していると考えられている。ロシアの北千島列島で繁殖するキタオットセイ成熟メスは、浅い潜水戦略をとっているが、日中に何をしているのかは明らかではなかった。そこで、採餌トリップ中の行動時間配分を明らかにすることを目的とし、育子中のメスにデータロガーと呼ばれる小型記録計を装着した(図1)。この結果、潜水は先行研究の通り、主に夜に行われており、休息が主にトリップの中盤の昼間に行われていたことが明らかとなった。

本種は冬季になると摂餌のための南下回遊を行い、日本周辺にも来遊する。これまで、主要な分布域である三陸沖から北海道にかけての太平洋側において、目視や捕獲調査によって生態が明らかにされてきた。しかし近年、北海道日本海側沿岸において漁業被害を起こしているのがキタオットセイであることが確認され(堀本ら 2011)、その実態を明らかにすることが求められている。そこで我々は、北海道渡島半島海域における混獲・漂着個体の収集、および調査船からの目視調査を行ってきた。その結果、胃内容物としてヤリイカやホッケなどが出現すること、その分布は、餌生物密度の高い場所と一致することがわかった。本種が沿岸で漁業と競合する理由として、北海道日本海側では大陸棚斜面が沿岸から近く、三陸沖よりも沿岸に分布することが一因であることが明らかとなった。本講演では、これらの結果を紹介する。



図1. データロガーを装着したキタオットセイ (Roma 氏提供)

Keywords: northern fur seals, data logger, foraging trip, migration, distribution

堀本高矩, 三谷曜子, 小林由美, 服部薫, 桜井泰憲. 2009年冬-春季の渡島半島西部から津軽海峡におけるキタオットセイ *Callorhinus ursinus* の来遊状況. *日本水産学会誌* **78** (2): 256-258 (2012)